

# 『特集「Lancet」への道』 群馬川崎病研究会編

井上こどもクリニック 井上 佳也

2000年の春であったと思う、友政剛先生より篠原真先生の論文（J Pediatr 1999; 135; 465-469）を英語論文一編の成果に終わらせてはならない、関連病院の先生方をお願いして前方視的多施設共同研究をとの提案がなされた。友政先生は論文作成に貢献され川崎病治療に精通されていた。教授であった森川昭廣先生は全面協力を約束され、循環器グループには何か始めるとなるとやたらに勢いのある岡田恭典先生がいた。かくして、森川先生、友政先生、統計学の専門家である竹内一夫先生（現埼玉大学教授）、小児循環器グループの医師により群馬川崎病研究会が発足した。私は大学に勤務するただ一人の小児循環器医として参加することになった。

議論を重ね、免疫グロブリン大量療法（IVIG）単独とIVIG/ステロイド併用投与の比較検討をするという研究の大枠が決まった2001年、私は米国留学の機会に恵まれた。2年後に帰国すると大学で業務を引き継いだ岡田先生のもとには90例あまりのデータが集積されていた。正直なところ患者のエントリーが順調であることを不思議に思った。かつては、関連病院の先生方に労力をお願いし患者のご家族から治療研究の同意を得るのは容易ではないことが予測されていた。これらを乗り越えた理由を探ったところ、森川教授、友政講師、篠原先生、岡田先生が直接関連病院をまわり研究内容を説明したこと、患者のご家族からご理解を得やすいよう説明パンフレットを作成したことを知った。関連病院では担当の先生方がご家族への説明やデータシートへの記載等に膨大な時間を割いていた。私は世の中にこのデータを出すことが大学に勤務するものの務めだと心の底から感じた。やがて182例が集まり、冠動脈病変合併頻度はIVIG単独投与群よりもIVIG/ステロイド併用投与群において低いという結果を報告した（J Pediatr 2006; 149; 336-341）。

時を同じくして、川崎病治療におけるIVIGの有効性をおつて報告（N Engl J Med 1991; 324; 1633-1639）した米国のNewburgerらのグループが、やはりIVIG単独とIVIG/ステロイド併用を比較する多施設共同研究を行っていた。我々のステロイド投与法はプレドニゾロンを通常量（2 mg/kg）から始め炎症反応沈静化後に患者の症状をみながら漸減するプロトコルであったのに対し、Newburgerらは数時間で終了する大量（30mg/kg）単回投与であった。単回投与によるリバウンド現象が予後に影響をもたらす可能性を私たちは予想していたが、案の定、2群間に冠動脈病変発生の差は認めず川崎病患者全員にステロイドを投与すべきではないという結論となった

(N Engl J Med 2007; 356: 663-675)。Discussionに重症川崎病患者においてはステロイド投与が有効である可能性がある、という一文があったのは救いであったが。

群馬県立小児医療センター循環器グループの中心であった曾根克彦先生の治療方針から始まった道程は約30年をかけ、小林徹先生が実務的中心となった全国規模比較試験の成果、Lancet掲載論文まで辿り着いた。原稿依頼を機会に振り返り、道程には常に俯瞰的に見守りながら道標を灯してくれた先生がいらしたこと、また小児科医として多忙な毎日を過ごしていた先生方に大きく関わって頂いたことを思い出した。本稿を借りて先生方に敬意を表し改めて深く感謝申し上げたい（謝辞：2007年12月三重大学講演時スライドより抜粋）。

謝辞			
群馬大学	県立小児医療センター	循環器グループ	統計
小林 徹	篠原 真	石井陽一郎	竹内一夫先生 (埼玉大学教授)
田村一志	小須田貴史	池田健太郎	
岡田恭典	小林敏宏	関 満	
荒川浩一	小林富男	下山伸哉	
友政 剛	田端裕之	鈴木尊裕	
森川昭廣	小野真康	渡邊正之	
曾根克彦			
群馬大学関連病院			
牛久英雄	小川哲史	小柳富彦	溝口史剛
深沢信博	河野美幸	鈴木僚子	池内由果
桑島 信	西村秀子	宮沢麗子	大須賀松樹
竹内東光	小和漸貴律	水野千珠子	高橋恭子
田代雅彦	松井 敬	志村幸恵	岩本洋一
前田昇三	橋 淳	渡辺美緒	中嶋直樹
五十嵐恒雄	服部重人	小池秀樹	石毛 崇
武井克巳	澤浦法子	高田知江美	小根橋実希子
荒木千晶	渡辺裕之	武井 仁	森田 涼
山田思郎	川嶋神明	牧阿西紀	八木久子
			井上貴博
			嶋海穂彦